『外国人に対するベトナム語能力枠』を考える
－わたしたちは、教室の先にある「社会」を見ているのか－

A Study of a "Vietnamese Proficiency Assessment Framework for Foreigners"
- Do we see "society" beyond the classroom work? -

田原 洋樹
Hiroki Tahara

立命館アジア太平洋大学アジア太平洋学部
Ritsumeikan Asia Pacific University (1-1, Jumonjibaru, Beppu-shi, Oita, 874-8577, Japan)

要旨: 日本の外国語教育にヨーロッパ言語共通参照枠(CEFR)が定着し、異言語間・異文化間「仲介・橋渡し」能力が重視されはじめた。また、コミュニケーションに必要とされる「適切さ」に従来の文法・語彙教育では捉えきれない社会・文化的な言語能力が取り上げられ、外国語教育は理念および現場において大きな転換期を迎えている。そこで、ベトナム語教育において、社会・文化的にみた「適切さ」をいかに盛り込んでいくかを論じた。

Abstract: The Common European Framework of Reference for Languages (CEFR) has taken root in Japanese foreign language education, and emphasis has been placed on interlingual and intercultural “mediation and bridging” abilities. In addition, the concept of "appropriateness" in cross-cultural communication requires social and cultural linguistic abilities, at present, unable to be expressed by conventional grammar and vocabulary education. This indicates that foreign language education has indeed reached a major point in both its philosophy and its application to teaching. Therefore, in this study, we discuss how to incorporate the concept of social and cultural “appropriateness” into Vietnamese education.

キーワード: ヨーロッパ言語共通参照枠、社会・文化的多様性、適切さ、ベトナム語
Keywords: Common European Framework of Reference for Languages (CEFR), Socio-cultural Diversity, Appropriateness, Vietnamese

1. はじめに

2018 年 4 月に始まった『アジア諸語の言語類型と社会・文化的多様性を考慮した CEFR[1]能力記述方法の開発研究』は科学研究費補助金による研究活動[2]である。本科研では、はじめに CEFR を取り巻く状況の急速な変化や新たな動向に関する情報収集や分析が行われた。前者については、もともと対象としてきた EU 圏の諸言語から世界的な拡大を見せていること[3]、後者については初版ともいえる CEFR2001 か

[1] ヨーロッパ言語共通参照枠　Common European Framework of Reference for Languages の略語。以下でもこの略語を使用する。
[2] 参加者間では便宜的に、研究代表者である富盛伸夫・東京外国語大学名誉教授に由来する名称で「富盛科研」と呼ぶことが多いが、以下では本科研と称することとする。
[3] 日本においても、初等中等教育に最も現実的な影響を与える存在である大学入学試験において、マークシート式で全国一斉に実施される大学入試センター試験は、2020 年 1 月の実施を最後に廃止され、2020 年度（2021 年 1 月に実施予定）から「大学入学共通テスト」と改められ、解答は記述式で行うとの方向性で改革が進められてきた。が、この移行の柱ともいえる記述式解答は紆余曲折を経て断念されている。他方、CEFR に目を転じると、CEFR 参照レベルを出願資格としたり、甚だしくは「対照表」に基づいて試験成績に加点したりと、CEFR 本来の意義や目的

ら最新版の CEFR2018 を俯瞰して、そこに見られる問題意識や言語教育の展開の変化などを扱ってきた。

CEFR2018 では、異言語間・異文化間を仲介するコミュニケーション能力としての mediation、すなわち「仲介・橋渡し能力」が重点化されている。すでに CEFR2001 において、教師および学習者は同一化できない異なりあう言語間、文化間に橋を架ける能力を育てるべきと問題提起されてきた。橋を架ける、ないし橋渡しをする、というのは、外国語学習や異言語間・異文化間コミュニケーションでは古くて新しい課題である。そして、CEFR2018 には社会言語能力に関する記述もあり、伝統的な言語能力観ともいえる、いわゆる「言語の四技能」にとどまらない問題への言及がなされている。あえて卑近な言いかたをすれば「どうやったら会話が続くのか」を考えることや、言語コミュニケーションを適切にやっていく能力はどのように捉えるべきなのか、を考えさせられるようになっている。

本科研の研究会において、筆者は CEFR の 3 レベルについて、「(ざっくりした言いかたで恐縮ですが) A は自分の身の回りのことを自分で解決できる言語能力、B は半径 3 メートル以内にいる相手とやり取りができる程度の言語能力、C は他者への働きかけやコミットメントができる言語能力、というのが大体の目安」と発言したことがある[4]。こう考えると、CEFR の 3 レベル、すなわち A、B や C とは「発音が上手」「単語を多く知っている」などの問題というより、より多くの相手との伝えあいができるか否か、より多様な場面で適切な言語行動がとれるか否かの区分であるように見えてくる。

さて、もともと EU 圏の諸言語を対象としてきた CEFR において、非 EU 圏、とりわけアジアの諸言語における適切なコミュニケーションと、その礎になる言語運用の能力をどのように考えていくのか、は大きな問題である。そこで、本科研では、「適切性」に配慮した社会文化的コミュニケーションとは何なのかを議論し、それらにはいかなる測定項目が有効なのかについても、いくつかの言語で具体的に検討してきた。本論では、ベトナム語教育の実践という立場で「適切性」に迫ってみたい。

2.「外国人向けのベトナム語能力枠」

筆者は、外国語としてのベトナム語教育の実態について数次にわたり口頭発表、論文発表を行ってきた。本科研では、『ベトナム語はどう教えられているのか、どう学ばれているのか』と題した口頭発表を行い[5]、ベトナム戦争終結後のベトナム社会主義共和国内における外国人学習者向けのベトナム語教育を以下のように概観した。

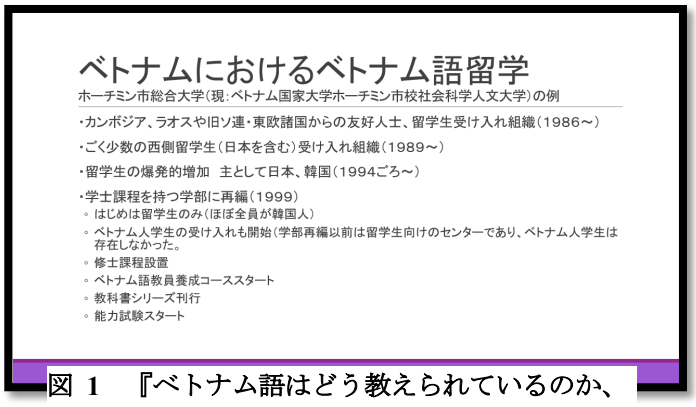

図 1　『ベトナム語はどう教えられているのか、どう学ばれているのか』より

筆者自身は、92 年から 93 年までにベトナムで留学生活を送っているので、このスライドの分類に従えば「ごく少数の西側留学生」のひとりであった。実際、留学先のホーチミン総合大学ベトナム・東南アジア研究センターにはわずか 30 余名の留学生が在籍し、なかには旧ソ連や旧東ヨーロッパ出身の学生が含まれていた。

当時は、統一的な教材や能力測定のしくみはなかった。また、授業は教員ひとりに学生がひとりの個人レッスン方式、あるい

から考えると些か逸脱した動きが見られるほどに拡大、定着してきた。これに関する論考は、筆者にははっきり述べておきたい事柄があるが、本論内では行わないことにする。

[4] 田原洋樹『CEFR『準拠』への道程 ～立命館アジア太平洋大学での実装例』　2019 年 10 月 4 日、東京外国語大学語学研究所にて。

[5] 田原洋樹『ベトナム語はどう教えられてきたか、どう学ばれてきたか』　2018 年 1 月 25 日、東京外国語大学語学研究所にて。

は 2～3 人の学生グループに教員 1 人が付くグループレッスンで行われることが多く、教材は個々の教師の手作り[6]、試験問題[7]もそれぞれの教師が自己の教授内容に即して作成したものであった。

このような時代に育った者にとって、2015 年 9 月に出された「外国人に対するベトナム語能力枠」[8]は驚愕と興奮を与えた。能力を測定する「枠」を設定するほどにベトナム語学習者人口が増えたのかという驚愕と、特にベトナム語教員として学習者から数年来尋ねられてきた「先生、ベトナム語って能力試験とか検定がないんですか」との問いに答えられるようになった興奮である。ただし、後者については、この枠を実際にどのように運用して能力を測定するのか、測定して得られた「結果」にどの程度の通用性があるのかについて明らかでなく、間もなく失望へと変質してしまった。

とはいえ、ベトナムはベトナム共産党一党支配の中央集権国家であり、教育訓練省が出した通達を「超える」通達ないし、それ以上に効力を持つ何らかの測定指標や測定の枠組みが出てくる可能性はなく、この測定枠は絶対的である。そこで、本科研にとって特に重要と考えられる部分に抄訳を付してみた。

外国人に対するベトナム語能力枠

（2015 年 9 月 1 日付　ベトナム教育訓練省通達第 17/2015/TT-BGDĐT 号に付随する文書）

Ⅰ．目的

外国人に対するベトナム語能力枠（以下、能力枠）は、以下の目的で使用される。

１．外国人のベトナム語能力を統一的に評価するための基準として。

２．カリキュラム構築、教材編集、各レベルの能力測定・評価の目安設定の参考に。

３．学習者がカリキュラムの学習目標に到達できるよう、教師が教育内容や方法、試験、評価を選択する際の基準として。

４．学習者が能力レベル毎に要求される内容や水準を理解し、自己評価する際の一助に。

５．ヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR と略す）を使用する諸国との国際協力、教育交流、文書や能力証明書の授受を円滑に実施するために。

Ⅱ．能力枠とヨーロッパ言語共通参照枠の相関

能力枠は CEFR を参照、応用した上に、外国人を対象としたベトナム語教育・学習・使用の実情や条件を加味して発展させたものである。能力枠は初級、中級、上級の 3 級に分かれ、6 レベル（レベル 1 からレベル 6 とし、それぞれ CEFR の A1 から C2 に相当）からなる。（以下略）

本文には、能力枠と CEFR の対照を示すチャートがあり、その後には各論の記述が続く。

1.　一般的な記述

2.　各技能の記述

2.1　聞く能力

2.1.1　聞く能力に関する一般的な記述

2.1.2　ベトナム人との会話を聞く

2.1.3　発表や討論を聞く

[6] パソコン普及以前の時代であり、配布資料は教員がタイプライターで打ったものが多かった。

[7] ベトナムでは、授業中の小テストから大学入試、大学の定期試験に至るまで 1 科目 10 点満点。

[8] ベトナム語の正式表記は Khung năng lực tiếng Việt dùng cho người nước ngoài である。以下、日本語では能力枠と記す。

2.1.4　情報や案内を聞く
2.1.5　ラジオを聴取する、テレビを視聴する
2.2　話す能力
2.2.1　話す
2.2.1.1　話す能力に関する一般的な記述
2.2.1.2　日常生活を送る
2.2.1.3　議論する
2.2.1.4　聴衆の前でプレゼンテーションする
2.2.2　相手と会話する
2.2.2.1　会話に関する一般的な記述
2.2.2.2　会話
2.2.2.3　売買とサービス
2.2.2.4　インタビューと応答
2.2.3　正確さ
2.2.3.1　発音と流暢さ
2.2.3.2　社会言語的適切さ
2.3　読む能力
2.3.1　読みに関する一般的な記述
2.3.2　情報を読み取る
2.3.3　ビジネス文書を読む
2.4　書く能力
2.4.1　書く能力に関する一般的な記述
2.4.2　レポートを書く
2.4.3　報告書や小論文を書く
2.4.4　相手と筆記のやり取りをする
2.4.4.1　筆記のやり取りに関する一般的な記述
2.4.4.2　ビジネス文書をやり取りする
2.4.4.3　メモを取る、メッセージを伝える、見本に記入する
2.4.5　文書を処理する
2.4.6　言語に関する一般的な指標
2.4.7　語彙
2.4.8　語彙をコントロールする
2.4.9　文法的な正確さ
2.4.10　正書法、綴りの正確さ

3. 社会文化的な「適切さ」への接近

「能力枠」には社会言語学的な視点の記述がある。

2.2.3.2　社会言語的適切さ

レベル 1

-すでに学習済みの、比較的簡単な文法・文構造を少し使用することができる。

-日々の生活で最も基礎的な語彙群や礼儀正しい表現を使用することができる（挨拶、紹介。招待、

感謝、謝罪など)。

レベル 2

-すでに学習済みの、比較的簡単な文法・文構造をたくさん使用することができる。

-xin（文頭に置いて丁寧な発言をする、他者に丁寧に依頼する語）, vâng（「はい」）, dạ（丁寧な「はい」）, ạ（文末に置いて敬意を添える語）などを用いた礼儀正しい言いかたが使える。

-日々の生活に関連する事柄を適切に表現することが少しできる。

-通常の家庭、教室、仕事で、簡単で適切なコミュニケーションをとることができる。

レベル 3

-基本的な語彙、文法をかなり正確に使用することができるものの、複雑な考え、馴染みがない話題や状況を表現するときには困難を伴う。

-一般的なコミュニケーションで、適切な言語使用ができる。

-礼儀正しい言いかたがかなり正確に使え、学校や職場での日常的なコミュニケーションで適切な対応ができる。

レベル 4

-かなり複雑な語彙、文法・文構造をコミュニケーションで用いることができる。

-コミュニケーションの場にふさわしい公式な言語表現を用いて、自信をもって、はっきりと、礼儀正しく発言できる。

レベル 5

-発音、豊かな語彙、複雑な文法・文構造を、正確に、自信をもって、効果的に用いることができる。しかし、しばしば発言を中断したり、別の表現を探したりすることがある。

-さまざまな成語や俗語に通暁し、コミュニケーションの変化を感じ取ることができる。しかし、しばしば聞き直すことがある。特に、聞きなれない方言を聞くときや、発話のスピードが速い場面においてである。

レベル 6

-発音、潤沢な語彙、難しい文法・文構造を正確に、自信をもって、効果的に用いて、ベトナム人の自然な発話に合わせてコミュニケーションできる。

-成語や俗語を用いて表現でき、表現の差が生む意味の差も理解することができる

-ベトナム人の言語社会的な、文化社会的な行動を理解することができる

-ベトナム人の文化社会的な差異、言語文化的な差異を理解し、把握することができる

本科研で社会･文化的特質に即したベトナム語コミュニケーション能力評価法を研究していくうえで、無視することができない「めやす」が明記されていると考えられよう。ただ、この記述は（ほかの CEFR に関する文書と同様に）個別的具体的というよりは、総論的で総花的であり、検討が必要である。

非母語話者の教師（筆者をはじめ、本科研に参加する多くの教師がこれに該当する）が自己の教育を内省する、あるいはカリキュラムを設計する際には一層丁寧な考察が求められよう。というのは、例えばベトナム語の場合､自己のベトナム語学習経験はもとより､ある程度まとまった期間のベトナム滞在、これは数週間の滞在ではなく年単位の現地生活がなければ、すでにレベル 1 で登場してくる「日々の生活」で用いられるベトナム語を想像することができないのである。そして、いささか批判めくが、外国人学習者にとっては、この「日々の生活」のベトナム語こそ､「コミュニケーションの場にふさわしい公式な言語表現」（レベル 4）よりも聞き取りにくく、適切に参加することが難しい。また、ベトナム語を「礼儀正しく」話すことについての記述がたびたび出てくるが、同様に「礼儀正しく話す」ことよりも「親しく話す」「親しい間柄で適切なコミュニケーションを持続させる」ことがはるかに難しいのであ

る。もっと言えば、「日々の生活」のベトナム語がもっとも難しいのである。

2019 年度に筆者がベトナム語の初級クラスで授業しているとき、学生が以下のような疑問を投げかけてきた。

> どうして、「元気ですか」「はい、元気です」「いいえ、元気ではありません」のような表現や、「風邪をひきました」とか「頭が痛い」などばかり出てくるのですか。

不思議に思い、続く発言を待ってみると、学生の主張は以下の通りであった。

> 「頭が痛い」から元気ではない、ってそりゃそうじゃないですか。「彼氏にフラれたから元気がない」とか、「テストが続いていて（勉強疲れで）元気じゃない」というのが現実的ですよね。それか、どうしても「病気だから元気ではない」を教えたいなら、「母が病気だから（心配で）自分も元気がない」みたいな文はどうですか。

筆者は「恐れ入りました」の心境であった。外国語の教師には「教えたいこと」が山積しているが、やはり学習者が「学びたいこと」を常に意識しなければならない。学習者が「学びたい」のは多くの場合において「使いたい」からであり、その「使う」場所は教室外の現実社会である。教えることの先に社会があるのか、という問いかけは重要である。

翻って、この能力枠は、非母語話者がどのようにベトナム語コミュニケーション能力を獲得していくのかというプロセスや、非母語話者にとって「何が難しいのか、何が易しいのか」という難易度、しかも現実のベトナム語生活を営むうえでの難易度には大きな注意が払われずに、あくまで教える側からの枠組みに終わっている点がやや残念ではある[9]。

そこで、これまで述べてきた背景を踏まえて、筆者はベトナム語コミュニケーション能力の社会・文化的「適切性」を見るひとつの指標として「社会・文化的適切性項目リスト」を試作した。

このリストを概観すると、教授内容としての難易度と、実際の運用、すなわち教室外の現実社会における「分かる」「使える」度合いには決して小さくないズレがあることが見えてきて、シラバス作成、教材編集にはさらなる練り上げが求められる。例えば、「相手との心理的距離を縮める適切な呼称を使える」という description に対応する内容は、教科書でも市販の語学書でも初期に登場する。教科書、市販の語学書の執筆・編集経験を持つ筆者自身も、会話のスキットを作成するために不可避の項目である「わたし」「あなた」について、出版社の編集者のことばを借りれば「シンプルに」「分かりやすく」記述を心がけて原稿をまとめた経験がある。これは、CEFR では A1 相当の内容である。1 人称、2 人称についての説明を飛ばして語学書を執筆するのは困難だし、授業を進めることも難しいだろう[10]。一方で、呼称を「効果的に」使うことで相手との親疎を表す、あるいは相手に対して当方の気持ちを伝えるような行為、また日々のコミュニケーションで「使い分ける」ことで相手との心的距離を伸縮させるのは、もはや高度なテクニックである。したがって、このリストを基にした教材を試作し、教室での使用や学習者の反応を観察しながら修正を加えていくことが必要になろう。

最後に、今後の展開を述べておきたい。

---

[9] 日本国内に 30 万人以上、アメリカ全土では 150 万人以上のベトナム系住民がいる。2 世および 3 世たちのベトナム語能力をどのように維持していくのか、教育していくのかは在外ベトナム人コミュニティのみならず、ベトナム本国の教育政策、対在外ベトナム人政策を考えるうえで重要な問題である。この点への一層の配慮や言及が望まれる。

[10] ふだんの会話で一人称や二人称の人称詞を用いない方が「自然」とされる言語においても、「用いない方が自然だ」という説明が必要だろう。

これまでの研究会活動および作業を通じて痛感したのは、教室の先にある「社会」を見ることの大切さである。例えば、筆者の本務校には常時 500 人を超えるベトナム出身の学生が在籍している。学習者にとってもっとも身近なベトナム語の「社会」は、このベトナム出身学生とのコミュニケーションであり、まさに能力枠のレベル 1 で出てくる「日々の生活」である。また、在日ベトナム人が 37 万人を超え[11]、日本を観光で訪れるベトナム人が年間 38 万人いる現状[12]を見れば、「これはホアンキエム湖です」「ハロン湾はここから何キロですか」のような用例よりも「日々の生活」にかかわる表現を教材に取り込んでいく必要があろう。在日ベトナム人の生態に関する報道も目立つようになってきた。窃盗や薬物犯罪などの刑事事件、そして社会・文化的な背景を異にする彼らが日本で直面する困難や引き起こすさまざまなトラブル[13]を知るとき、日本人と在日ベトナム人の共生に役立つ表現、すなわち日本人とベトナム人が「つながる」ためのベトナム語教育を構築する時期に来ているのではないかと考えている。

参考文献

三上直光. 2007.『ニューエクスプレスベトナム語』, pp.26-27. 白水社.
清水政明. 2011.『世界の言語シリーズ　ベトナム語』, p i. 大阪大学出版会.
田原洋樹. 2005.『ベトナム語のしくみ』, pp54-55. 白水社.
田原洋樹. 2013.『ベトナム語表現とことんトレーニング』, pp18-21. 白水社.

執筆者連絡先:tahara@apu.ac.jp

本稿は科学研究費助成事業基盤研究（B)「アジア諸語の言語類型と社会・文化的多様性を考慮した CEFR 能力記述方法の開発研究」(2018 年度—2020 年度、研究代表者富盛伸夫、研究課題/領域番号 18H00686）の研究成果のひとつとして公開するものである。

[11] 出入国管理在留管理庁統計。https://www.e-stat.go.jp/ 最終閲覧日 2019 年 12 月 15 日。
[12] 日本政府観光局調べ。2018 年確定値は 389,004 人。
[13] 本校執筆時点で直近のトラブルは、富山市内のスポーツ公園でベトナム人団体が使用後に掃除を怠り、ごみを放置したことに起因する「ベトナム人、一時利用制限措置」である。北日本新聞に記事がある。
https://webun.jp/item/7623200 最終閲覧日 2019 年 12 月 15 日。

付表：ベトナム語「社会・文化的項目リスト」

CEFR 難易度	Descriptors	言語行動のタスク	社会・文化的方略	補足説明　（Supplements）
A1	人間関係に応じて、定型句など失礼にならない程度の挨拶表現を使うことができる。	定型句で挨拶する	定型表現により人間関係を配慮する	挨拶の構成要素＝定型句、人称表現、文末助詞
A1	相手との関係を考慮し、失礼にならない程度、人称表現を使うことができる	人称表現を使う	相手との社会位置的関係で礼儀を保つ	自己紹介、簡単なやりとりをする際には相手との関係で失礼にならない程度の人称表現を用いる。
A1	相手との心的距離を縮める適切な呼称を使える。	親族名の呼称を用いる	親族名で呼ぶことで相手との距離を縮める	疑似親族意識が強く、「おばあさん」「おじいさん」「子どもたち」といった親族名を使って相手を呼ぶ範囲が広い。フォーマルで丁寧な呼称を使い続けていると、相手との距離が縮まらない。
A1	相手の外見、言動で気付いた点を一言、ほめることができる。	相手についてほめる	言語的に好意を示すことで円滑になる	社交辞令的に相手の外見で気付いた点を一語でよいから、コミュニケーションのきっかけとする。
A1	丁寧さや敬意を表す文末助詞を適切に使うことができる。	文末助詞を使う	丁寧表現を使うことで人間関係に配慮する	文末助詞として、節や語の末尾につける語や、単独で返事に使用し、話し手の発話を、丁寧、礼儀正しい、思慮深い、柔和といった印象を与える語を使えるようになる。
A1	終結小辞や人称表現により男女の文体の差を区別できる。	文体差(性別)を区別する	男女の文体の違いを理解して配慮する	終結小辞や人称表現で差別化を行うが、語彙に大きな差はない。
A1	相手の年齢を聞くことができる。	年齢を話題にする	社会的立場の確認男女の文体の違いを理解して配慮する	ベトナム語の特徴として、相手の年齢に応じて、人称代名詞（一人称、二人称）を変化させる必要がある他、言葉遣いや行動も変化する。
A1	家族構成などプライベートなことを聞いて、または返答ができる。	家族を話題にする	相手のプライバシーに敢えて踏み込むことで心理的距離を縮	具体的かつ個人的なことを聞くことで相手との距離を縮めた上で、そこで入手した情報をもとに、今後のコミュニケーションにも活用し、より良い関係構築を行う。

			める	
A1	相手の住んでいるところを確認できる。	住所を話題にする	相手のプライバシーに敢えて踏み込むことで心理的距離を縮める	具体的かつ個人的なことを聞くことで相手の距離を縮める。
A1	相手の収入や社会的地位（職業）を確認できる。	社会的地位を話題にする	社会的立場の確認をして適切な社会関係を構築する	社会的地位、特に職業については、適切な呼称のために必要。収入などを尋ねることもタブーではない。
A1	謝罪の定型句とそれに応える定型句を使うことができる。	謝罪する	定型句を用いつつ謝罪を受け入れる態度を示して相手との関係を保つ	何度も謝罪を繰り返す必要はない。また、謝罪表現の出現頻度は高くない。
A1	感謝の定型句とそれに応える定型句を使うことができる。	感謝する・理解する	定型句を用いて謝意を大きく示して相手との関係をよりよくする	感謝は一度言い、後日、改めて言うことは少ない。
A2	対話者に応じて、定型句＋αの一言を添えることができる。	一言添えて表現・行動をする	相手との心理的距離を縮める	＋αの一言＝家族の近況,外見をほめる　など
A2	卒業年、誕生年、干支等を聞くことができる。	年齢確認をする	相手との社会的立場の確認ができる	単純に年齢を聞くだけでなく、相手との関係性によって、卒業年、誕生年、干支等、聞き方を変えることもある。
A2	相手の趣味や好みを確認できる。	趣味・好みを話題にする	相手との距離を縮める	具体的かつ個人的なことを聞くことで相手の距離を縮める。
A2	市場などでものを買う時、値段、数量や品目の交渉ができる。	（売買などで）交渉する	ベトナムの慣習にあった表現で円滑に交渉する	市場等での値引き交渉は一般的であるが、定価が表示されているデパート、スーパー、コンビニ等では行わない。

A2	家族に関する話をすることができる。	家族の話題を取り上げる	相手との心理的距離を縮める	相手との共通点、会話のきっかけを探すうえで効果的。
A2	定型句を用いて失礼にならないよう依頼することができる。	依頼をする・理解する	人間関係に従った定型句で礼儀を保つ	相手との心的距離によって定型句は異なるため、適切な表現を使用する必要がある。
A2	相手に伝わるように、積極的な勧誘・提案ができる。	勧誘・提案をする	誠意を見せ相手に好意を示して誘う	謙遜はあまりせずに、ポジティブな要素を述べて積極的に誘う。
A2	礼儀正しく依頼、勧誘・提案を受け入れることができる。	提案を受け入れる	謙遜な態度を示して相手に負担をかけない	すぐに勧誘や提案を受けるのではなく、数回遠慮した後に勧誘・提案を受け入れるのが一般的。
A2	相手が納得できる内容で依頼、勧誘・提案を断ることができる。	提案を断る	避けられない事情を話して負担をかけない	簡潔に、直接的に断ってよい。また、断られた側はしつこく食い下がらない。
B1	多様な文末助詞を効果的に活用できる。	文末助詞を効果的に活用する	モダリティや語用論的な効果をもつ	文末助詞には、話し手と聞き手の属性や両者の関係、聞き手に対する働きかけ、話し手の出来事に対する心的態度を表す機能がある。
B1	自他の社会的立場を的確に把握した上で、挨拶によって人間関係を効果的に構築することが出来る。	適切な挨拶ができる	社会的立場にあった人間関係を構築する	対話者との距離を縮めることができる。
B1	内容に応じて適切に表現で依頼することができる。	依頼する・理解する	適切な表現で相手に受け入れてもらう	依頼内容の重軽に応じて、対価を予め提示するなど、相手が快く依頼を受け入れる表現。
B1	ベトナムでの謝罪行動を理解し、適切に応じることができるともに、自らも適切に謝罪することができる。	謝罪する・理解する	適切な表現で相手との関係を保つ	謝罪と合わせて、言い訳する技術も必要。
B1	ベトナムでの感謝行動を理解し、適切に応じることができるともに、自らも適切に感謝することができる。	感謝する・理解する	適切な表現で人間関係を良好に保つ	定型句の謝辞表現の代わりに、ほめることなどで感謝を表すことがある。
B2	社会的立場、年齢、親疎に応じた関係性を総合的に踏まえ適切な人称表	人称表現を効果的に使う	人間関係を対話者の心理をつかむ	相手が喜ぶ、満足、そして応じることができ、対話者とのコミュニケーションを上手く運べる。

	現を使用することができる。			
B2	テト（ベトナムの旧暦正月）、先祖の命日などベトナムの伝統的文化行事に参加できる	慣用句、人称表現を適切に使う	ベトナム人との心理的距離を縮める	ベトナム社会に根付く行事、風習の理解と参加。
B2	場面に応じて、話し言葉と書き言葉を適切に使い分けることができる。	口語・文語の文体差を使い分ける	文体差で発話場面に最適化する	話し言葉と書き言葉で語彙、表現などの要素が異なる。
C1	婉曲的な表現を理解するとともに、言い難いことを失礼のない形で言うことができる。	婉曲的表現を効果的に使う	間接的発話行為により礼儀を保つ	苦情を言う、不同意、指摘などをする場合。
C2	ベトナムと話者言語の社会・文化の差異を理解し、ビジネスやトラブル解決などの場面で効果的に仲介することができる。	仲介する	社会･文化の差異を理解できる	お互いのコミニケーションストラテジーの差異などを理解し、ベトナムのストラテジーに則した形で効果的にコミュニケーションを行う。
C2	物事を円滑に進めるための潤滑油的表現を理解し､発することができる。	ユーモアなどを効果的に使う	人間関係を潤滑にする	ベトナムの社会・文化に基づく笑いのツボや言葉遊びの理解と運用。
C2	対話者の理解を深めるための手段として、効果的に慣用句を使うことができる。	慣用句などを効果的に使う	ベトナム特有の表現で理解を助ける	自他双方が自身の意図の理解促進のために使用するベトナムのことわざや慣用句の高度な運用。
C2	ベトナム各地の主要な方言に熟達し、円満な人間関係を構築することができる。	方言、地域的話題を効果的に使う	地域差を理解し､人間関係を潤滑にする	相手との共感、共鳴。
C2	ベトナムでタブーとされる話題を回避したコミュニケーションの展開。	タブー的話題を回避する	禁忌的表現を避けて人間関係を保つ	注意を要する話題＝党および政府への直接的な批判。なお、親しい間柄での本音トークも重要。